

話本の入話について

著者	竹田 復
雑誌名	漢文學會々報
巻	6
ページ	41-48
発行年	1937-11-05
URL	http://doi.org/10.15068/00146814

話本の入話について

竹 田 復

今日は標題に掲げたる如く、話本の入話に就て御話を致すつもりであります。順序として先きに話本に關し其の概略を御紹介致します。

今日傳つてゐる話本は、大體宋の末頃より以後のものと認められて居りますが、此の話本の由來する所は唐時代の變文であります。

變文は敦煌石窟から發見された數多の唐代寫本の裡から見出された文學上極めて價值ある作品であります。今日敦煌掇瑣・敦煌零拾・沙州文錄等に記載されてあるもので、その面影を窺ふことが出来るのであります。而して變文は、始め佛教流布の必要から佛典の故事を歌ひ物にしたり語り物にしたものが、漸次文人に採り入れられて一般民間に著聞した故事を歌ひ語つて民衆に聞かせるようになったものであります。即ち、古典の故事を更に變化して講唱すると云ふ意味で變文と申すのであります。今日残存の變文によつて其の組織を見ますと、翻譯された佛典が韻文と散文との二體から出來て居ると同じ形態で、但偈即韻文は五言であるが、變文は當時流行の歌曲の形式をとり入れ複雑になつて居ります。

樂府雜錄に『長慶中（穆宗中・唐の末）俗講僧文叙善吟經。其聲宛暢感動里人。』とあるを見れば、變文の起りは佛教經典の講唱に始まり、漸次一般民間傳説の講唱に移つていつたことは想像に難くはありません。かくて唐の中葉より盛行した變文の講唱は、北宋説話の流行を生じたのであります。

説話或は平話とは、平易な俗語で丁度讀切りと云ふ位の程度に故事を纏めて語つたものであります。北宋の末年から南宋、即、十一世紀の末から十二世紀にかけて汴京及臨安を中心として一般民間に盛行したものであります。此の説話に關しては、宋・孟元老の東京夢華錄（學津討源本）周密の武林舊時（武林掌故叢編）耐得翁の都城紀勝（棟亭十二種本）吳自牧の夢梁錄（武林掌故叢編）等に記載せる如く専門の説話人があつて、自らを説話的といひ、書會・雄辨社と稱する説書場を有して話本を底本として節面白く語つたりして聴衆を引きつけ一席の語り物を演じたもので、之が後世の章回小説即長篇小説の起源を爲すに至つたものであります。

當初此の話本は一篇づゝ隨時單行された爲に、古いものは全く消失して居ります。但よほど後になつて、數種づゝの話本を合刻する風が起つてまゐりました。明の中葉嘉靖年間に、清平山堂洪楙に依り、五篇づゝ一卷に纏められた話本集があらはれました。今日便宜上清平山堂話本と呼んでゐるのがそれでありませう。亦繆荃孫により紹介された京本通俗小説は全書の卷十より卷十六までが殘存致して居りますが、編者も發行所も未だ知ることが出来ません。内閣文庫には萬曆年間態龍峯の刻した四種の話本も保存されて居ります。

此等の話本集により、どうやら宋元の舊本の面影を知ることが出来ませんが、更に明末馮夢龍の編纂になる三言の裡にもかなりの舊本が含まれ研究者に豊かな材料を提供して居ります。

却説此等の話本の組織を見ると普通入話と正文との二部から成立して居ります。即、前語り、或は序とでも申す部分と本文とあるのが普通の形になつて居ります。大體に於て入話の種類は

- (1) 閒話或は詩・詞話……………碾玉觀音(京)
- (2) 一詩或は一詞……………菩薩蠻(京)
- (3) 正文と相類せし故事……………錯斬崔寧(京)
- 4 正文と反對の故事……………刎頸鴛鴦會(清)

等に分つことが出來ます。

以下話本中舊本に屬すものと考えられます、簡帖和尚・西湖三塔・碾玉觀音・西山一窟鬼・錯斬崔寧・勿頸鴛鴦會の六種に就て入話を説明してみたいと思ひます。

京本通俗小説の碾玉觀音は上下の二回になつて居りますが、上回の本文は咸安郡王の野遊に始まる爲に、入話は此の春を惜しむの情を内容と致しまして、先づ最初に孟春・仲春・季春の風致をそれぞれ一詞を以て歌ひ出し益しく春の歸り去ることを述べ、次に此の春が去り行くのは東風の爲である、否春雨である、東風でも春雨でもない、柳絮である、いや胡蝶が春を連れて行く、黄鶯が鳴くからである、杜鵑が鳴くせいで云々と當時の有名な詩人の詩・詞を引き來つて證となし、迂餘曲折を経て漸く本文に入るのであります。結局入話は十一の詩詞を以て充てられてあります。

下回は鷓鴣天詞を以て始まり、本文に入ります。

西山一窟鬼の入話は念奴嬌詞に始まりますが、此の詞は古人の詞章を集めて出來たむねを述べ、謁金門寒食詞（陳子高）・品令暮春詞（李易安）浣溪沙春雨詩（延安李氏）等十四の詞を連ね

話説沈文述是一个士人。自家今日也說一個士人。因來行在臨安府取選。變做十數回躑躅作怪的小説。我且問你。這個秀才姓甚名誰。却説紹興十年間。

と本文に入り來るのであります。

簡帖和尚の形式を簡單に示せば

鷓鴣天詞 〓 宇文綬の故事 〓 留文（以上入話）

鷓鴣天詞 〓 本文 〓 南郷子 〓 話本説徹・且作散場

となります。

西湖三塔の入話は

七言四句詩 || 眼兒媚詞 || 韻文 || 四句詩 || 七言四句詩 || 留文 || 留文 || 七言四句詩 || 詞 || 留文

と數種の詩詩の間を巧みに説明を加えて連絡して行きながら、看官、則ちお客の氣分を統一して本文を始めます。

錯斬翟寧は七言八句詞の次に正文と相類する魏鵬舉の故事を説き出し慢々的に本文に入るのでありますが、此處に於て注意すべきは

這回書單說一個官人。只因酒後一時戲笑之言。遂至殺身破家陷了幾條性命。且先引下一個故事來。權做個得勝頭廻。と申して魏鵬舉の話が始つてゐることでありませう。

勿頸鴛鴦會は

七律 || 詞 || 趙象步飛煙の故事 || 留文

となつて正文とは相反する説話を入話として居りますが本文に入る前に「權做個笑耍頭回」といふ字が見えて居ります。

さて此處で問題となるのは得勝頭廻と笑耍頭回とであります。魯迅は小説史略に於て本文に入る前の詩詞叙述は得勝頭廻と云ふ。頭廻とは前回（前置き）の意味で當時話を聞くものは軍人と一般人が多かつたから吉語（縁起のよい言葉）として得勝と云ふ語を用ゐたのであると申して居ります。胡適は之を敷衍して得勝は即得勝令で曲調の名稱である。元來説書人が開講の前聴衆が集らないときに太鼓を鳴らして開場を知らせる。而して得勝令は常用の鼓調である。得勝令は又得勝頭廻とも云ふ。轉じて得勝頭廻となつたのであると説明して居ります。又青木氏は關漢卿の救風塵雜劇第四折・双調新水令の終りの「怎禁那得勝葫蘆。說到有九千句」とあるを引き「事件の前置きばかり長くて本筋に入ると失敗したことを冷笑した」と申して居られます。葫蘆とは仙呂宮に勝葫蘆と云ふ曲調があります。以上諸説がありますが得勝令は極めて普通の曲調であることは元曲では第四折に得勝令を用ゐてゐる例が多いのであります。又内閣本全相平話中の秦併六國（上）に、「這頭回且說個大略。詳細根原后回便見。話說秦六年始皇帝登殿……」とあります。これ等により

て考へますと、頭回或は頭廻は前回、第一段、頭段の意に取るのが至當であります。然らば胡適の得勝令は一つに得勝廻頭と名くと云ふ説明は如何でありませうか。

次に勿頸鴛鴦會の笑要頭回に就て考えて見ますと、頭回の回と廻の字の相違は既に全相平話に見る如く、無論音の上の問題で怪しむには足りませぬ。而して笑要と云ふは如何？之は得勝頭廻をもちつて説書人が面白く聞かせる意味で、「先づお笑ひ草の前置を一席」と述べ立てたものと思れます。或は得勝頭廻の場合と同じく笑要令と云ふ曲調があつて矢張り俗耳に熟して居たので得勝の代りに用ゐたのでありませうか？此等の點は皆様の高教を仰ぎたいと思ひます。次に入話に似通つた致語と云ふものがあります。致語は致辭とも申します。

宋史樂史に

樂工致辭。繼以詩一章。謂之口號。皆述德美及中外蹈舞之情。初致辭。羣臣皆起聽。辭畢再拜。

とあり、元史禮樂史には念致語と見えて居ります。又王靜安の戲曲考原には

雜劇亦有歌詞。宋史樂志謂。眞宗不喜鄭聲。而或爲雜劇。辭未嘗宣布于外是也。其詞如何今不可攷。唯三大宴之致辭。則由文臣爲之。故宋人集中多樂語一種。又謂之致語。又謂之念語。

と申して居ります。致語は莊重な儷文で太平を稱へ天子を壽いたもので樂舞を進める意を述べたものであります。致坊致語・小兒致語・女童致語の名稱が見えて居ります。つまり樂人が之の致語を念じて之に次で小兒隊とか女童隊等の樂隊が始る譯になります。

此の致語と入話とは極めて密接な關係をもつてゐると思ひます。由來詩歌音曲は宮庭と民間との間に絶えず交流作用が行れ、雅樂が俗曲に俗曲が雅樂に、互に影響し合つてゐることは申迄もありません。殊に宋代に於ける宮庭雜劇の形式は民間に移つて戲劇の發展を促したのでありますから、致語の形式が民間にとり入れられたことも想像し得るのであります。宋史の樂史を見ますと、歌辭に對しては「唱」字を用ゐ、「念」字と區別してあります。故に前述の如く、念

致語とは嚴肅な口調で誦したものと思れます。

私は話本入話の冒頭にある詩・詞は是れ致語の流を追ふたものと見たいのであります。但詞を用ゐる鷓鴣天と云ふ様に斷つてあるもの、例へば簡帖和尚の如きは歌つたものでありませうが、詩の方は歌つたのではなく矢張り「念」じたものと思はれます。例へば「這八句詩」とか「却纔白過這八句詩」とか「這四句詩」とか云ふ調子はどうも歌つたものとも思はれません。大宋宜和遺事の入話を見ますと、冒頭に次の七言八句詩を以て致語と爲し、

暫時罷鼓膝間琴 聞把遺編閱古今

常嘆賢君務勤儉 深悲庸主事荒淫

致平端自親賢哲 稔亂無非近佞臣

說破興亡多少事 高山流水有知音

次に唐堯虞舜より唐明皇に至る歴代の治亂興亡の迹を叙し、最後に鄭康節の七言八句の詩を以て留文として居ります。その他五代史平話にも致語を用ゐた例があり、水滸傳にも、元來毎回の始めに致語のあつたことは、周亮工の書影に、「削其致語、獨存本傳」とあることによつても知られます。

内閣文庫藏京本増補校正全像忠義水滸傳評林の第八卷に

凡引頭之詩。皆未干水滸内之事。觀之據眼。故寫於上層。隨愛覽者覽之。

又卷十二には

各傳皆無引頭之詩。未見可取。觀覽者無非覽看詞語。觀其事實。豈有看引頭詩者矣。故此引頭詩。反擴人耳目。故記上層。隨人覽看。

と述べて上の評欄に移してあります。

此の水滸傳の所謂引頭詩即致語を、現存せる百回本水滸傳により見てみますと、話本のそれとは少しも異なるので

あります。如此話本に於ては致語を形式的に襲用して見たが、これ丈では一般人の興味を引かないのでそこで之に故事を加へて一篇の前置きとし、茲に完全なる入話の形式が整つたものと思はれます。

次に入話と引子との關係でありますが、これは言葉の意味から察しても明瞭であります。醒世恒言第二十一卷呂洞賓飛劍斬黃龍に、呂洞賓と黃龍禪師との問答があります。純陽の語に、「先生和尚這問句。只當引子。不算輸贏。我有一轉活。初便賭賽輸贏」とあるのを見ると引子の語は始めに佛家の問答に用ひられたとも考へられます。而して完全に入話の意味に扱つてゐるのは今古奇聞の第十九卷曹孝子感異夢獲親骸の中に「我要說孝子萬里尋親遺骨。且先說尋兄弟的事。作一引子與看官所話」と言ふことで明かに知ることが出来ます。

又入話には二三異名があります。まとめて申し上げます。魯迅の中國小説史略に夢梁錄を引き「蓋小説者能講一朝一代故事。頃刻間捏合」と云ひ、都城紀勝の説く所も同じく惟捏合を提破としてありますが此の捏合・提破は即入話のことであると申して居ります。

前に述べた全相平話の頭回も同じで、此の用法は古今小説第十五卷の史弘肇龍虎君臣會の中に「説話的。你因甚的。頭回説這八難龍笛詞。自家今日不説別的。説兩箇……」と見えて居ります。

百二十回本水滸傳の第五十一回には「説了開話」なる語があります。警世通言の拗相公飲恨半山堂には「開話已畢。未入正文」とあります。京本通俗小説では開話になつて居りますが前が詞で以て説き起して居りますので、開話の方がよからうと思ひます。醒世恒言第三十五卷徐老僕義憤成家では「原是入話。還未曾說到正傳」と言つて入話の語を明かに用ゐて居ります。

さて語られる爲の小説即ち話本が、讀まれる爲の小説即擬話本、或は單編小説へ進展するに従ひ、入話の内容にも多少の變化を生じ來るのは免れないことであります。即ち單なる時事或は故事以外に、文學的とか前代或は當時に噴傳され或は搬演された物語が多くなり、従つて入話自身が一篇の纏つた小説の體裁を爲すに至りました。例へば古今小説卷

九斐管公義還原配の入話なる斐管公還帶の故事は太平廣記第十七の斐度、關漢卿の晉國公斐度還帶(錄鬼簿)還帶記(曲海總目提要)日記故事卷三方便類帶還歸人にも見えて居ります。又兼善堂本通言第六卷爺仲舉題詩遇上皇の入話は、獨立して三桂堂本通言第二十四卷卓文君慧眼識相如となつて居りますし、その基く所は清平山堂話本風月瑞仙亭篇に殆ど同じなのであります。かくて小説の發展に従ひ漸次入話は獨立せる一篇となり、引子或は楔子と稱せられ長篇小説の冒頭に掲げられることになりました。前述の水滸傳も其の一例で李卓吾先生批評水滸傳(百回本)には各篇致語がありましたが、明末の百二十回水滸全書になりますと第一回の前半を獨立させて引子と爲し、金聖歎本では楔子としてあります。又金瓶梅詞話(嘉靖頃)の第一回景陽岡武松打虎・潘金蓮嫌夫風月に於ては清平山堂話本の刎頸鴛鴦會の入話をつぎはぎして其れの入話と致して居ります。

以後有名な長篇小説、水滸・金瓶、三國・西遊の四大奇書を始め、清朝の儒林外史・紅樓夢・鏡花緣・老殘遊記等皆引子或は楔子を冒頭に有して居ります。

戯曲に於ては南曲の開場詩が矢張り入話の系統を引いて居るものと思ひます。

一體入話は語り物發達の途中便宜的に發生したものとばかりは言へませぬ。其の内容から見て支那に於ける文學的作品には當然用ひられる表現法であると思ひます。此は遠く詩經の興・比の比喩的表現形式に溯り得るのであります。此種の表現法は支那の詩歌文章に殆んど傳統的と申して良い勢力をもつて居ります。かかる文藝表現の傾向が以心傳心、不識不知の間に民間文藝に應用され、非常な効果をあげたと考へられます。

即話本の入話は、内容的には遠く比興の表現形式の影嚮を受け、形式的には致語の系統を引き、而して本文の話の段落と相應じて長篇小説に移る過程を示して居ります。戯曲に於ては、戯文の題目、或は南曲の開場詩に致語の名殘を留めて居ります。